



「赤い靴児童文化大賞」授賞式 山下公園にて

昭和61(1986)年 『おもちゃ美術館活動』

地域社会との絆を深めてくれた子どもたちとの交流

特 養ホームを一般社会に近い普通の「生活の場」とするならば、ご近所や地域と関わり合うことはごく自然なことです。

さくら苑では開苑当時から、地域に開かれた施設であることを目指してきました。さくら苑は大きな家であり、そこには動物もいれば、子どもも訪れる。そんな普通の家庭環境に近づけることで、特養ホームを地域とのコミュニケーションが生まれる場、人と人が自由に触れ合える場に変えていこうと考えていました。

昭和61(1986)年9月15日の敬老の日。おもちゃ美術館活動が始まりました。芸術教育研究所(東京都中野区)の初代所長である多田信作先生、事業を継承された多田千尋先生の多大なご指導、ご支援によって実現

したものでした。この活動は、地域の子どもたちが自由に遊びに来て、ご入居者と交流できる環境をつくり、苑全体を活性化させることを目的としてスタートしました。

まず、子どもたちが遊びに来やすい環境づくりから始めました。地域の方々からたくさんのおもちゃや人形、遊具、ジオラマなどをご寄贈いただきました。また、英国やスウェーデンの大使館から寄贈された多種類の動物ミニチュア、北欧のジオラマ、松下電器産業株式会社(現・パナソニック株式会社)から贈られたテレビゲームのモニターなど、およそ1,400点のおもちゃ類が苑内のあちこちに置かれました。子どもたちは自由に出入りしておもちゃで遊び、ご入居者からおはじきやめんこの遊び方、竹とんぼや紙ヒコーキの作り方を教わり

ます。手先の運動は、ご入居者にとって良いリハビリにもなりました。子どもが遊びに来るようになると、お母さんたちもさくら苑のバザーや餅つきのお手伝いに来られます。こうして地域のネットワークが広がっていききました。

人は一生をかけて培ってきた思いをなんらかの形で残して旅立ち、残された者はそれを受け継ぎ、生きてゆく。かつては自然だった世代間のバトンタッチが希薄になっていく中で、おもちゃ美術館活動はそれを実感する格好の場でもありました。

平成6(1994)年、「赤い靴児童文化大賞」をいただく栄誉に浴しました。これは、おもちゃ美術館活動によるご入居者と子どもたちの活発な交流が評価をいただ

き、横浜市の市民団体「赤い靴記念文化事業団」(代表 松永 春先生)から与えられたものでした。同事業団からは、日頃から高木東六先生のピアノコンサート、ジュニアコーラス隊の可愛い合唱「かもめの水兵さん」など多彩な活動をして頂きました。

この受賞により、私たちは改めて横浜という街で特養ホームを運営していることの意味や広がりを感じました。自由で、大らかで、のびのびとした横浜という都市。さくら苑の取り組みを温かく見守り、理解してくれるこの街で、仕事をさせてもらえる幸せを感じ、ずっとこの横浜で仕事をしていきたい。その思いを強くしてくれたのも、おもちゃ美術館活動がもたらしてくれた宝物でした。



ウクライナの音楽使節団が来苑

昭和62(1987)年 ユーモアの国『ヨコハマY²共和国』活動

高齢者が自ら生き生きと輝ける国づくり

Y²とは、「ワイ」の2乗。すなわち「ワイワイ」。「ヨコハマY²共和国」はさくら苑の別名であり、ワイワイ楽しく生きていこうという宣言でもあります。

高齢のご入居者は、常に老いや病、いつか訪れる死という重い現実に向き合っています。自分と同じ仲間の入居者が亡くなり、見送る機会にも遭遇し、その重みを直截に感じる日もあります。そうした日々の中で私たちが取り入れたいと思ったのが「日々の生活に楽しみを見つけること、ユーモアのある生活」でした。老いの寂しさや死の苦悩と対極にある遊びやユーモア感覚を持つことで、今日を精一杯生きることを楽しみ、また、死を生と共にある普通のこととしてポジティブに受け止める一助にならないだろうか。これは、日本に死生学を広め

ておられるアルフォンス・デーケン先生が説く考え方につながるものでした。

その遊びやユーモアを施設運営の中に具体化したのが、「ヨコハマY²共和国」活動です。遊びとユーモアを日々の生活の中に取り入れるためには、生活のステージそのものをガラリと変えるくらいの仕掛けが必要だと考えました。さくら苑をひとつの国になぞらえ、入居者に役割を持ってもらい、受け身ではなく主体的に活動できる仕組みをつくらうと考え、この共和国を建国しました。建国式には国内のみならず、デーケン先生はじめアメリカやインド、韓国など在外外国人の方々が大量訪れてくれました。

共和国の代表は、互選で選ばれた「都筑(ツヅキ)の

風桜花媛(カゼサクラハナノヒメ)」。外部の方々との交流行事があるときは代表として出席します。療育音楽活動を主宰する「Y²オーケストラ担当長官」、毎朝苑内放送で入居者や職員に語りかける「放送担当長官」、おしゃれを広める「孔雀庁長官」などを配し、ご入居者や職員がそれぞれ就任しました。

このような国づくりを通して、社会に根強くあった「特養ホームは寂しいところ」とは違う、活気があって楽しくご入居者が輝いている国にしようと願ったのです。また、職員とご入居者は各々国民として対等の生活者であるという意識を共有したいという願いもありました。

その後「ヨコハマY²共和国」の活動を知って、多くの演奏家や歌手の方が演奏会などを催して下さいました。

共和国の建国は、地域や外国とのつながりが生まれるきっかけともなりました。建国当時には思いもよらない交流が生まれ、世界の20カ国以上の国々からボランティアや舞踊、音楽使節団、見学者、研修者などの来訪がありました。その都度、ご入居者の出番となり活動が広がり、生活に活気が生まれました。





(左)療育音楽活動の練習風景 (右)指導にあたる馬場悦子先生

昭和63(1988)年 『療育音楽活動』

みんなで一緒に歌い、演奏する喜び

日本で初めてのミュージックセラピー「療育音楽」を創始されたのは東京ミュージックボランティア協会の赤星建彦先生です。赤星先生が厚い信頼を置いた馬場悦子先生(スーパーバイザー)は、さくら苑の療育音楽活動を心を込めて指導して下さいました。それは馬場先生ががんで入院される直前まで1回も休むことなく、15年余りにわたって続けられました。

さくら苑で療育音楽活動が長年にわたり力強く進められたのは、高齢者が音楽を通じて生きる喜び、歌う喜びを感じて元気に暮らしてほしいという赤星先生、奥様の赤星多賀子先生、馬場先生の熱い思いがあったからでした。それは私たちの心に強く伝わってきました。療育音楽はさくら苑のご入居者に活気をもたらす最大

の力となりました。

療育音楽活動がスタートした当初は、参加しないご入居者もありました。でもそこに馬場先生の心を込めた、たゆみない働きかけがありました。誰もが知っている歌の合唱や演奏を元気いっぱいやっている仲間の姿を見ることで、だんだんと参加するご入居者が増えていきました。

毎週金曜日の午後2時からが療育音楽活動の時間。次第に増えた参加者は常時40～50人にまでなりました。ご入居者の間で馬場先生への信頼は絶大なものがありました。先生の姿を待って、毎週金曜日を楽しみにし、それを生き甲斐にしている人もいました。また、魂の込めった馬場先生の姿に接し、多くの職員が人間

的にも成長する機会を得ました。

昭和63(1988)年に「Y²オーケストラ」を結成。毎年開催される「みんなの音楽会」(高齢者介護施設や障害者施設などが参加する音楽発表会)や日比谷公園、山下公園、保土ヶ谷公会堂のアトラクションなどにも出演しました。

この活動を通して、目に見えてご入居者が生き生きしていくのを見るのは、私たちにとって驚きであり発見でした。呼吸法の練習は肺活量を回復するリハビリになり、リズムトレーニングではリズム感を取り戻すことができました。合奏をみんなで行うことで仲間意識が高まり、楽しいコミュニケーションが生まれました。リズムに合わせて身体を動かしたり、合唱・合奏をしたりすることで、

身体機能が徐々に回復していく例も見られました。脳卒中の後遺症で片麻痺となった方が、片手でのエレクトーン演奏に意欲を燃やす姿も見られました。それまで楽器を触ることはなかった方でしたから、その方のご家族にとっても嬉しい驚きだったに違いありません。

ベッドで寝て過ごすのではなく、ベッドから離れ、みんなで何かをする楽しみ、喜びを味わってほしいという私たちの願いは、馬場先生の療育音楽活動によって目に見えて実現していったように感じられました。

馬場先生はお亡くなりになりましたが、先生の思いは、今は佐藤喜美子先生によって受け継がれています。さくら苑の食堂ホールには馬場先生の遺影が掲げられ、私たちの生活を優しく見守って下さっています。



(左) 語り部活動の練習風景 (右) カラーバードの活動風景

平成6(1994)年 『AOL(語り部活動、カラーバード活動)』

自分を表現することで、新たな自分と再会する

AOLとは、Art of Lifeの略。Artとは芸術ではなく「表現」。そして表現とは、自らの意志で選択し決定することと言い換えることができると、私たちは考えています。ご入居者に介護サービスの受け手としてだけでなく、自分で何かを選び取ることが当たり前の生活を生きてほしい。特養ホームの管理された環境で生活していると、高齢者は主体的に生きる喜びを見失いがちになり、意欲が減退し、終日ベッドで過ごす生活になることもあります。

しかし、そもそも生きることとは何かを選択し、表現する営みと言えるのではないのでしょうか。介護を必要としている高齢者であろうと、それは変わりません。

ある時、「語り部活動をしてみませんか」と提案して下

さったのは、絵本・児童文学作家の正岡慧子先生です。この言葉からAOL活動のひとつ、語り部活動が始まりました。参加者の読む本の選定や割り振り、指導は正岡先生。発足当初の参加者は6人でした。

先生は絵本や民話、文学作品などから、参加者の個性に合った話を選んでくれました。そして参加者が物語を語る時、先生はじっと目をつむって聞き入ります。読む人の心が語りに乗っているのか、それとも単に文字を追って文を読もうとしているのか、聞き分けておられるように感じられました。そして「そこ、もう一度読んでみて」と促されると、参加者の顔にふっと気合いが入るのが見えます。聞いてもらえていると思うと、やはり嬉しいし、意欲が湧いてきます。先生も「ここは伝えたいと

ころですよ」と勘所を示されますから、参加者もやりがいが生れます。

そうして練習を重ねて、1年後に開いた発表会。語り部活動前は認知症状さえあったご入居者が、ボランティアのプロ琵琶奏者の演奏をバックに「耳なし芳一」を聞かせてくれました。会場の照明が落とされ、揺らめくろうそくの光の中で語る「耳なし芳一」には鬼気迫る迫力がありました。また東北弁のご入居者が語った東北地方の悲しい物語「おしら様」には、会場は音もなくシーンと静まりかえりました。

「ぬり絵を使って好きな色を好きなところに好きなだけ塗る」というカラーバード活動は、カラーセラピストの久保みより先生の提案から始まりました。色は心を語るも

うひとつの言葉。大事なのは塗るという行為そのものであり、それはその人の心象表現でもあります。参加されるご入居者は輪になってテーブルを囲み、久保先生は後ろから黙って見続けます。ぬり絵の完成度の高さではなく、自由な心の表現こそ大事だとの考えからです。

年一回の作品発表会。作者のご入居者は、ホームの廊下壁面に掲げられたご自身の作品を食い入るように見ていました。ご家族や地域の人たちも参観に訪れてくれました。

活動に参加された皆さんは、それぞれに正岡先生や久保先生に出会い、失いかけていた「表現する喜び」を感じているようでした。